

第4回目 感想

*環境情報学府 環境生命学専攻

M1 女

3限の酒井先生の講義では、植物生態学の研究者となるまでに先生の歩まれた人生について、率直なお話を聞くことが出来ました。まず、大学入学以前から特に生物学が大好きで、まだ教養課程であった大学2年生の頃から志望の研究室を見つけて、その研究室への配属を目指して努力されるなど、目標を見つけ、目標を達成するための強いエネルギーをお持ちだという印象を受けました。また、「大学院生のスキルアップ」や、「プロジェクト雇用のポスドクに期待されること」など、私達大学院生に向けて、実際的なアドバイスをたくさん頂けたように思いました。例えば、「大学院生のスキルアップ」のポイントとしては、「論理的思考」、「柔軟な着想」、「企画、行動力の向上」。そのために有効な方法としては、「きちんとした文章を書く訓練」、「ブレインストーミング（複数人でも、個人でも行える）、周辺学生との交流」など。今からでも是非、実行してみたいと思いました。「プロジェクト雇用のポスドクに期待されること」では、個人と組織の両方がhappyになれるwin・winの関係性を目指すことなど、研究分野だけでなく、社会人として生きていく上でも有効な戦略を伺えたように思いました。フィールドワークの必要となるタフな環境の中で研究に励まれ、また、研究者としての定職を得ることの難しさを経験される中でも、研究職を貫かれた先生の原動力のようなものについてお聞きしたところ、研究によって今自分一人しか知らない成果を得られるような研究者としての醍醐味や、学生の頃から労力をかけてきた自分の研究の積み重ねがあり、それを捨ててまで別の道というようなことはやはり考えられなかった、ということをお話し頂きました。先生がそのようにお考えになるのは、やはり学部、大学院、研究生・ポスドクと、それぞれの時期にご自分の研究に対して一所懸命、努力、邁進されてきたからこそであるように思いました。講義の最初の方のお話では、「日本は生物多様性のホットスポットである」、ということを知りました。国連生物多様性条約などを新聞でも目にしたりしますが、生物多様性というものは失われてしまっただけでは、手遅れになってしまうものなのだと思います。自分自身の専門ではありませんが、日本に生まれた者としても、いま現在、存在している多様な生物、固有種が失われることがないよう維持できたら、という願いを持ちました。

4限の竹田先生の講義では、「最大の贅沢を持続する」（→研究とは、社会からさせてもらっている贅沢であり、最大の贅沢を持続するというのは、最高に面白く、かなりしんどい、というお話が最後にありました。）というタイトルでお話が進められました。高校までは、大学受験・進学熱とは無縁の環境で育ちながら、高校3年生の1年間の自己流の勉強法により志望大学へ合格するなど、「目的に対して、最小努力で達成する」

という考え方をお若い頃から実践されていたのだと感じました。また、特に高校までの環境により、好きなことを伸び伸び勉強されてきたという印象も受けました。このように、「目的達成のために必要なことを自分なりに分析し、それを実践する」、「好きなことへの探求心が強い」というような先生の印象を、講義全体を通して感じました。例えば、業務効率の向上を目指して、従来とは別のシステムを導入、社内に広め始め、その結果、情報システム部門が作られるなど、企業の一若手社員の誰もが出来るようなことではないと思いました。学部卒業後の企業就職、出産、ビジネススクールへの進学、博士後期課程への進学、その後、研究者へと、それぞれの節目ごとの判断力など、自然体でありつつ、芯のある生き方をされてきているように感じました。最後の方で先生がおっしゃっていた、「(若い頃、ある時期に集中して頑張ることは大抵の人にできるが、)長い期間ひたすら一定のスピードで走っていくことができる人は実際にはそう多くはない。」という言葉が自分にとっては印象的でした。瞬発力というよりは、持続力の方が自分には多少はあるように思うので、先生のそのような言葉は、自分にとってはとても励みになりました。また、人間は年齢的に大人になったからそれで大人だというのでははなく、親や先生など自分を教育してくれる立場の人がいなくなった後は、自分で自分を教育するような長い期間が続くんだな、と自分の中だけで今まで漠然と考えていたのですが、先生のお話の中でも「自分の良いところを見出し、育てていくのは自分自身と社会に対する責任である。」という言葉があり、自己マネジメントの有効性、その継続の必要性を自分自身、改めて感じました。

今回のお二人の先生方に共通して感じたのは、お互いを理解し協力できるパートナーを得られているという印象でした。結婚により、家事や育児への既成概念や過度の期待を女性が受ける傾向にあると感じていましたが、共に働き、共に家庭を支えあえるような家族をいつか自分も作れたらと思いました。また、家庭内だけでなく、親身になってくれる相談相手、理解者(出来れば複数人)を得るということも、両方の先生がお話されていたことでした。自分は人に相談したり、頼み事をしたりすることがとても苦手なのですが、先生方のように周囲の人々との交流、協力関係も少しずつでも築いていける人間になれたらと思いました。

* 環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻

D1 男

酒井先生、竹田先生の貴重なライフヒストリーを聞けることが出来た。竹田先生は育児のために3回の引越を繰り返した。という話が印象的だった。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

D1 女

今回の講義では、女性研究者として、先生方が今日までに体験をされた辛かったことを多く語って頂けました。成功談やうまくいった話、ラッキーな話を聞く機会は他でもあるのですが、今回のように苦しかった気持ちの部分の聞いたことは、とても励みになりました。私にとっては心に残る有意義な時間となりました。

しかしながら、先生方に辛い時期があったとしても、結果的に今の立場にいらっしゃる理由には、明確な共通点があると感じました。それは、人一倍に前向きで、打たれ強い、人から否定されても諦めない、そして何よりもご自身がなさっている研究内容が好き、だから今日まで続けられたということではないでしょうか。話を伺いながら、自分の職業経験と照らし合わせていました。「前向きな気持ち、我慢できる強さ、好きを作ること」は研究職だけではなくどんな職業を続けるにも共通することだと思います。辛い中にもワクワクする喜びの瞬間はどんな仕事にも訪れます。そして、その瞬間は努力を続けた者だけが味わうことのできる喜びでしょう。この喜び体験が、女性として悔しい思いをしても、次への努力の原動力となっていくわけですね。

ところで、まだ喜びの瞬間が無い時期に、辛い時を乗り切る力はどうしたら湧いてくるのでしょうか。先生がおっしゃったように「何とかなる」という思いが大事だとは思いますが、誰もが抱けるわけではなく、どこかに自分自身に対する信頼や自信があるからこそ持てるのではないのでしょうか。では、自分に対する自信はどうしたら持てるのでしょうか。女性研究者になるためにはこういった資質の有無が大きいように感じました。

自信、今の研究を始めたばかりの自分も持ちたくて、自信を付けようと論文を読みあさっています。現時点では、これらの資料は膨大に膨らみすぎてまだ未消化のままですが、私のようなタイプは地道な努力の中で自信を付けていくのがよいでしょう。では、こうした地道な努力を続ける原動力はどこから生み出せばいいのでしょうか。もしも頼る家族もなく、甘える相手もない立場であったら、今日の努力は明日に繋がると思い続けることだけでしょうか。なにをするにも、継続力は基礎能力です。子どもの時から体験を積むことが重要課題のようです。

「自分は研究者になる資質はあるのか、誰にもわからない」、「社会人経験があると不確実性がプレッシャーとなり、よけいに辛い」は、本当に思い当たります。ここまで頑張ってきた先生でもそういう思いをしたというお話を聞くことができた上に、自分の今の模索行為が肯定された部分もあり、励まされた思いです。まさにこれも頑張る原動力の一つです。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

M1 女

このお二人の講義は、かなり対照的だと感じられました。まず、理系・文系の違いです。そして、何より話してくださった内容です。酒井先生は博士課程までは研究でかなり迷われたという点が多く、研究とキャリアに引きずられてようやく教員となったという印象でした。同じ生物系研究をするものとしては、データに関しての失敗など非常にリアルに感じられました。結婚に関しては、夫は研究仲間でもあり、仕事をあっせんしてくれもして、でも現在は一緒に住んではいっしょじゃないとのことで新しい形の夫婦だと思いました。

一方、竹田先生は学業一本道でなく会社員時代を経験することで逆に研究に戻ってこられたというタイプでした。竹田先生もまた、研究に至るまでにかなり迷われたのだという印象がありました。竹田先生のお話を聞いて、これから就職するに当たり会社員を経験してからまた研究に戻りたくなるようなことはあるだろうか、自分はプロという段階にまで達せられるのだろうかと深く考えさせられました。

* 環境情報学府 環境生命学専攻

M1 女

今回も貴重なお話を聞くことができとても参考になりました。

酒井先生は植物生態学者ということと私が学部生の時から植物を専攻してきたこともあっていつもよりも身近な気持ちで聞くことができました。竹田先生のお話は今回のタイトルからもとても面白く“プロになるということ”の大変さと難しさを感じることができました。

お二人のお話を聞いて女性という立場であれば仕事をしていても勉強を続けていても結婚・出産という出来事が必ずついてまわるものなのだとことを改めて感じました。結婚や出産に対して否定的ではないのですが、例えば仕事をずっと続けたいと思っても結婚をして出産ということになれば必ず育児休暇という期間が入り休まなければいけなくなる、それでも仕事が続けていくためには周囲の協力も会社の理解も必要不可欠だと感じました。私が現在就職活動生ということもあり、女性がずっと仕事を続けていきたいと考えている場合はただ単純に興味がある会社かどうかということだけ

ではなく結婚や出産に対して理解のある会社なのかどうかも考慮に入れることも大切なことだと思いました。

仕事や勉強を続けてプロになるということはとても大変で難しく時間のかかること、そして女性の場合はその過程で結婚や出産といった大きなイベントがあるかもしれません。それでも続けていくためには自分の強い意志と周囲の理解と協力が必ず必要だということを感じました。

私も将来は仕事を続けて結婚をして出産をしたいと考えていますが今回の講義を聞くまでは今の時代、当たり前誰でも出来ることだと思っていました。しかし、どんなことであっても両立することは簡単なことじゃないということを知ることができたのでこれからの就職活動に活かしていきたいと思います。

* 工学府 物理情報工学専攻

M1 女

酒井暁子

学部の研究を始めたころの段階から話をしてくれたため、より身近に感じて聞くことができました。初めころは上手くいかずに悩んでいた時期もあるのは、研究者として一線を歩まれている方でも同じなのだなあと感じました。

研究内容も、自身の専攻である情報工学とは全く違う分野ですが、植物の生え方を視点を改めてより広い範囲でとらえるアイデアがとても面白かったです。

まだ誰も知らない新しい知識を開拓していくことや、道なき山奥の静けさや自然の美しさなど、研究者として感じる喜びをとて楽しそうに話していたのが印象的でした。

近年女性の研究者の少ないことが問題となり、ここ横浜国立大学も含め各自治体で様々な取り組みが行われています。制度や仕組みを整えるのも大事ですが、一番効果があるのはやはり、実際に働いている女性の研究者が生き生きと楽しそうに仕事をするということだと改めて思いました。

竹田陽子

いったん社会に出てある程度キャリアを積んでから、社会人ドクターになりアカデミックな道に入った例は今までの講演ではなかったので、とても興味深くききました。研究者になるというと、学部からそのまま大学院に入って博士号を取り、アカデミックな職を得るのが一般的です。しかし一度社会に出ることで、学ぶことの重要性や、本当に何を学ぶべきかが明確になるという面もあることを今回の公演を聞いて知り、キャリアの選択肢の幅が広がったように思います。

環境情報学府 環境生命学専攻 M1 女

第4回 10月17日(土) (3,4時限)

酒井先生, 竹田先生

酒井先生の講義は、先生の思いがストレートに伝わってきたのが印象的でした。それまでの先生方の経験談はどちらかといえば平然と話されていたのに対し酒井先生は女性研究者として苦勞されたことを具体的に話されていました。中には先生にとってお話ししたくないような出来事もあったかもしれませんが、お話して下さったことに感謝し、自分ももっと頑張らなければならないと感じました。

竹田先生のお話は経済の知識が不足している私にとって理解が難しかったのですが、印象的だったのは先生の生き方、働き方です。先生の働く上で常に上を目指している姿勢や、そればかりでなく家庭を大切にしている生き方に刺激を受けました。